



榛名山朝朗  
箕輪村夕霞

薦旗群馬嘶

三編大尾

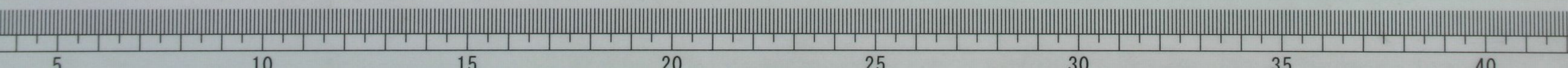
金松堂梓

雜賀柳香編  
梅堂因愛画

下

中

上







10

15

20

25



A530  
7



蓆箕群馬嘶  
雜賀柳香著  
梅堂國安画

三編  
上之卷

金松堂梓

< 48-83 47 >



管仲が老馬雪中と導き雲長の赤兔馬故障と忘れを馬の  
性たる良し一て且義なり然るも瘋癲狂駈の時人喰馬と  
るるありとぞ去べ一匹の馬狂ひて千匹の馬共狂ふ世の諺  
の群馬の嘶翻したる筵蓆と巻收めたる三編目一鞭直よ  
千里の駿筆世の流行の先駈に雜賀が例の手細捌き乗廻  
したる皇城の鞞下へ勿論全國一般よく此を知る伯樂あり  
て良馬の數ふ實入の声價鳴らま硯摺墨の功頭は且一太  
團圓乗鎮めたる讀切物此駿馬として鹿とする超高きたを  
保証の為馬丁代りふ嚮と採って序の拙文を添やると云爾  
明治十四年戊己年仲秋  
猫々道人頓題

群馬三上





羊田



三ツ村 塚越伊勢松

三ツ村 太町由造



正木 二等巡查

矢島 二等巡查



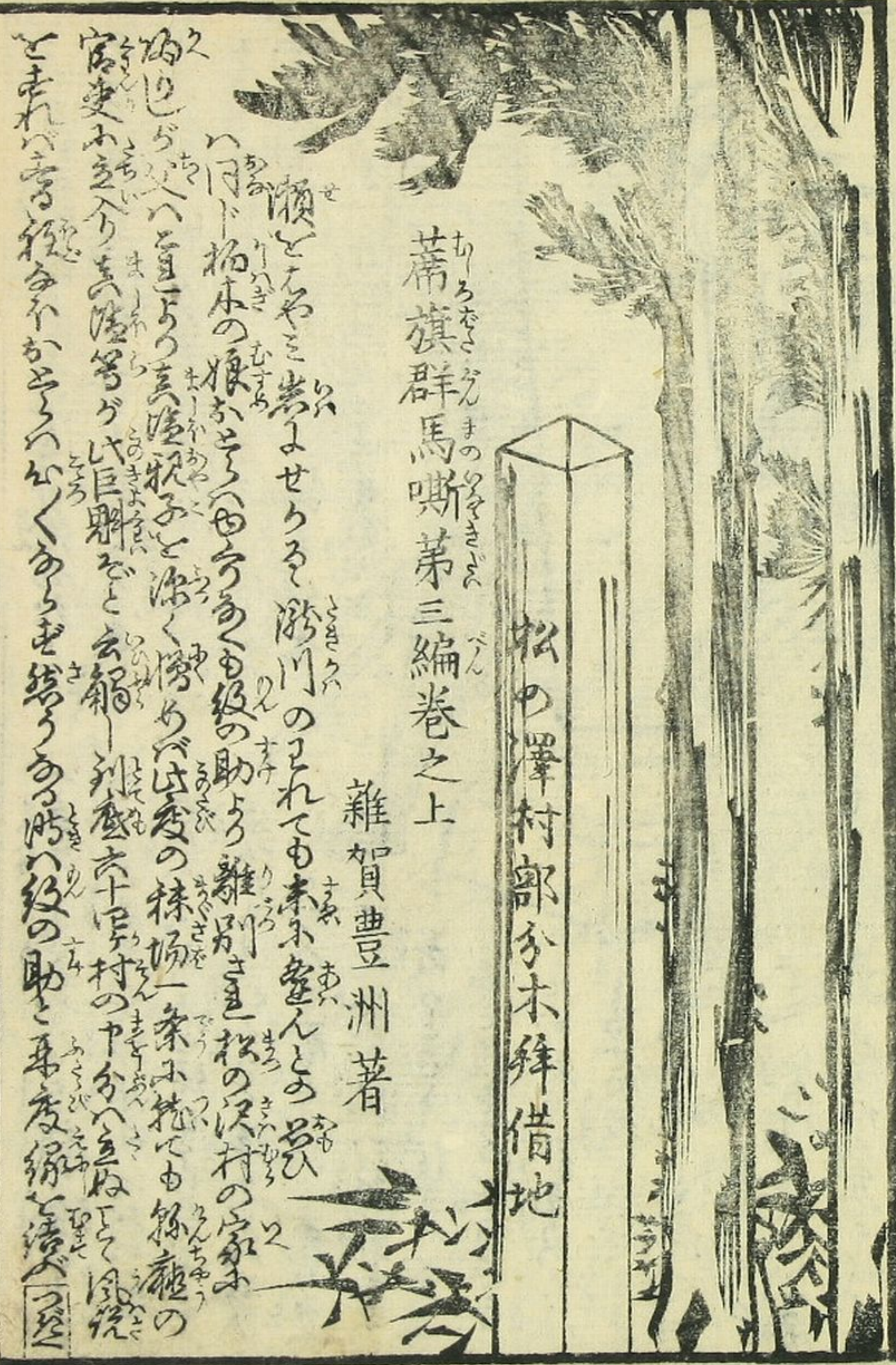


真塩紋弥

松の澤村部分木拜借地

荻旗群馬嘶第三編卷之上

雜賀豊洲著



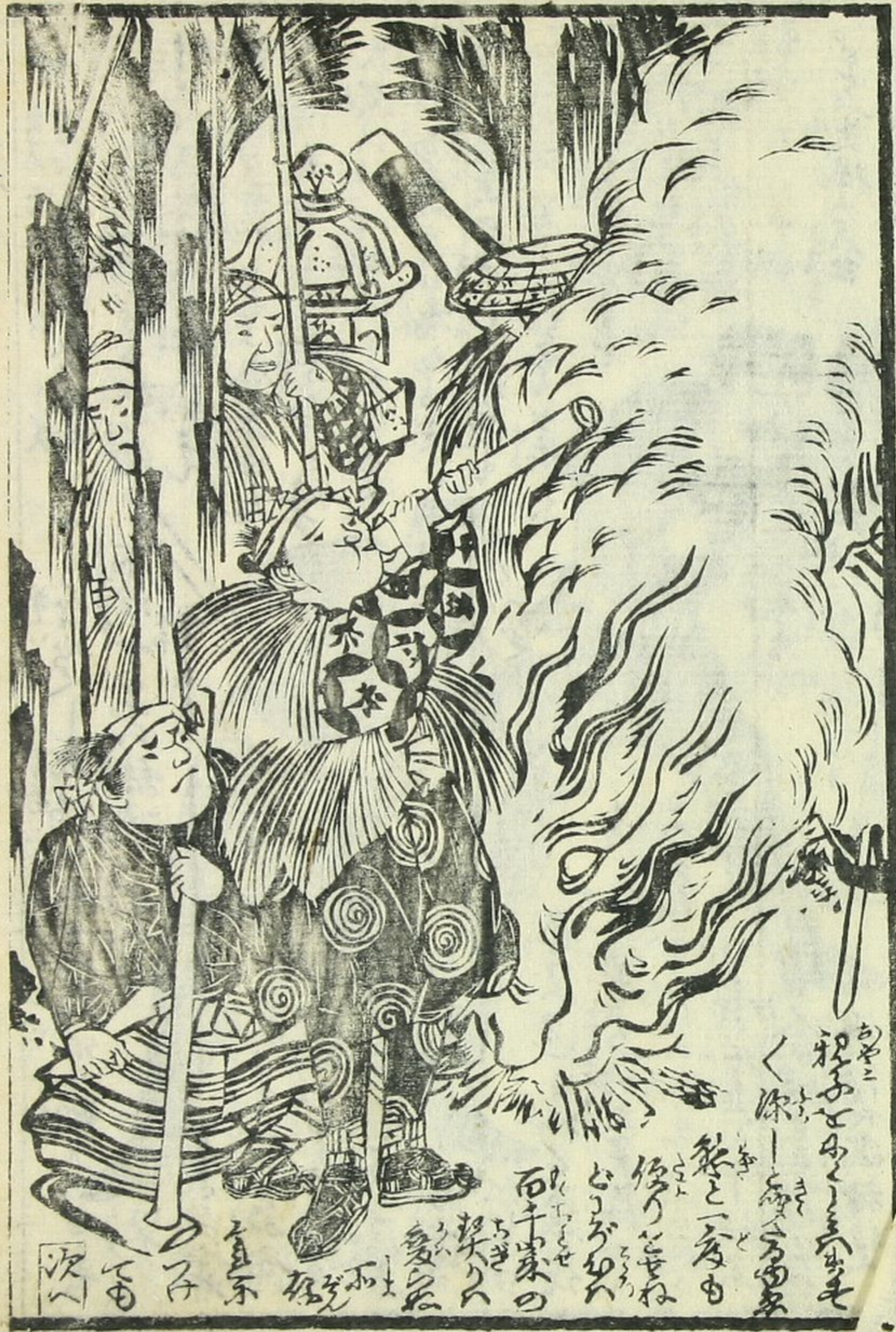
瀬と名三岩よせりる 濠川の己れでも未不壺んとあひ  
 日向の松木の根おさるる 由りあも級助の助方 離別さ直松の沢村の家  
 ぬじが父へ道より美陸筑子と添く 傍りばは香の株場 一条小枝て由 孫禮の  
 官吏ふまふり美陸筑子と添く 巨魁と云箱 別處六十里村の中分へる ぬ  
 と来れり 後合ふかどしんか かくあらむ 坊うあつ 級助の助と 再度級と 後



つぎ 月ハ神示無きと云はば由治られたと云と  
 打ちつゝ秋まの早晩 暮くと病ハわくまは長  
 長満ハ源くおとろた 厭勞て余り居てくま  
 由名又惹心配しつゝ 病廢てなると今月一日  
 村の法もへ綴目布のまゝに世ハ保者  
 おつぎのつゝ 父が昔めふまきぬと  
 乙事



▲ 五出のちやち村の人おもを  
 へせんとまのまを 撰取めて村の社へ  
 賽ふ一の者居の傍からこのつと  
 若うけりまのちやく 振之とハハハ  
 げけるや別且下波も暮ハ焦  
 きて葉下 惚入殺の助也  
 愛りとをうう 疑きてあつ  
 一かと疑まると人目やあ  
 とお割り 疑面めと恨  
 そゆせや我をむつとさる  
 とハ疑まるとも疑く知  
 せりまはまどいれが  
 知小引久父西七  
 及うけりまも我く



おま  
 親おとせつゝ  
 く 漆一  
 梨と一  
 後り  
 とうが  
 百十  
 梨入  
 梨入  
 直系  
 子  
 次へ











つき 上納小及在老且信用  
 緋の香樹の糸袴料金額  
 紀載の二軒出へ一の山嶽  
 意を難無一汗流地無  
 上車致し不地流布の株場  
 先由侯渡一お故なく於  
 分本間松林の二種小  
 中より一更七は侯渡を  
 有最由人長人民費用  
 振の取合ふ於合をさ小  
 其地策の考うるも有侯  
 海より長代長は口口連  
 且長長代長より海く注  
 意する人長人民痛く心



△村の株場より種並口侯渡  
 其下且松の次村分木地の  
 最も和鮮の有りし事入長村  
 更由長代長お故に於此存す  
 故のよへ人長村の人心  
 年松下鉄群て度外  
 人民百の志於小  
 和代長代長ありて  
 伏て流布をうり  
 望明流  
 十五  
 △六月九日 兩群多於中  
 株場入舎のうち六十村  
 其代長寺村長流級株  
 福傳村長寺村長流級株  
 柿村長寺村長流級株  
 下小傳村長寺村長流級株  
 所田長流級株分村長流級株

死は有之種不取以て  
 人長生株林を等小老  
 岡小生死一回養育の  
 裁許は流文あり月和  
 北つき西地より之有侯  
 の事札一補程をさ故  
 何分たりとも同振をさ  
 あいさつ最と有本和  
 命の最再は流喋一  
 今日の大集会小あり  
 場命あるなり卒著述  
 の得て山懐考は流外  
 今迄前百十年の  
 横切の流八十餘









つきめぞ我ちら下と致集まり之千  
 一人年及びびくは是より人教と之をふ  
 かねて若村の女長と教と之をふ  
 一月於若村の女長と教と之をふ  
 戸長若村久清の宅下  
 女三つち村の戸  
 長年田九年の宅  
 一室の若村の女長と教と之をふ  
 若村久清の宅下  
 戸長若村久清の宅下  
 女三つち村の戸  
 長年田九年の宅  
 一室の若村の女長と教と之をふ

長  
 森

長谷川  
 上申者やふい一高  
 長谷川  
 上申者やふい一高

長谷川  
 上申者やふい一高



金別ちとく人集まり  
 波と下ととを奉りて海  
 くのきりてとく人集まり  
 孫長谷川  
 孫長谷川  
 孫長谷川  
 孫長谷川

長谷川  
 上申者やふい一高

長谷川  
 上申者やふい一高

長谷川  
 上申者やふい一高





つぎぬふも編類の委をうりと思ひ解りたるもの由を叙しし事其の  
 お達せし書と終極せしうと恥年奉らるるふた代人名のふ要用せし  
 千田金一及びふ徳二重と云ふ御代名をいふ書のおうりし書  
 村分長若升村長村長村長と云ふ村分長若升村長村長と云ふ  
 下の運送の  
 由と推測す  
 有清集せし書  
 と云ふし文も  
 ざつと云ふおのあや  
 あやねど  
 果は  
 〆



▲まゝく入敷のかさ  
 のとをて門揚まきの初釋  
 あと平破ふるうり  
 日月十日の  
 紀官

〆

高橋阿傳夜叉評

八尾編

綾事夜叉廻春秋

八尾編

國定忠次義経高橋

九尾編

名廣洋邊洋

九尾編

水錦隅田曙

三尾編

腕競心三俣

八尾編

格蘭氏傳倭文賞

三尾編

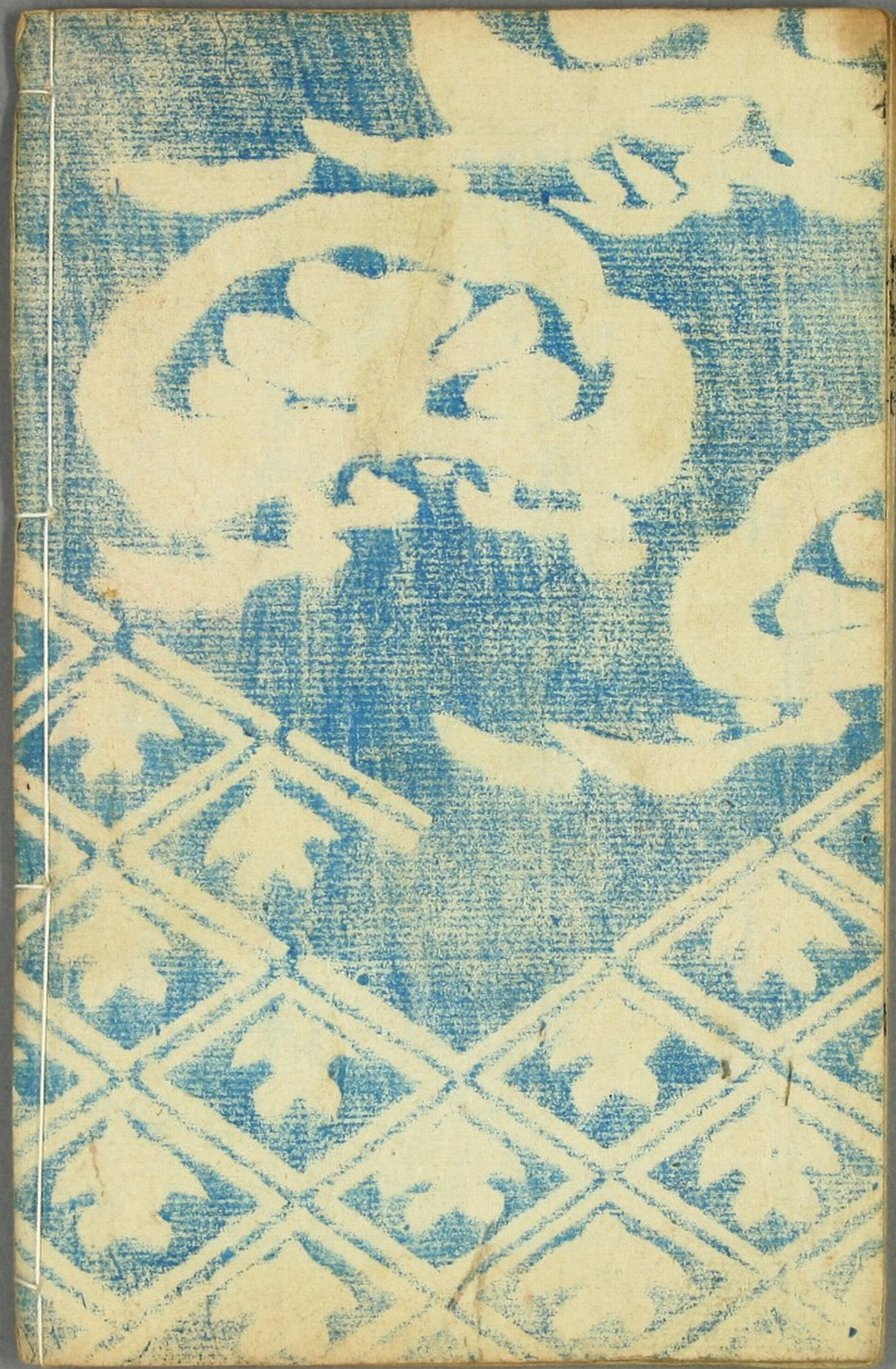
總相場花王夜嵐

八尾編

地本問屋

金公書









10

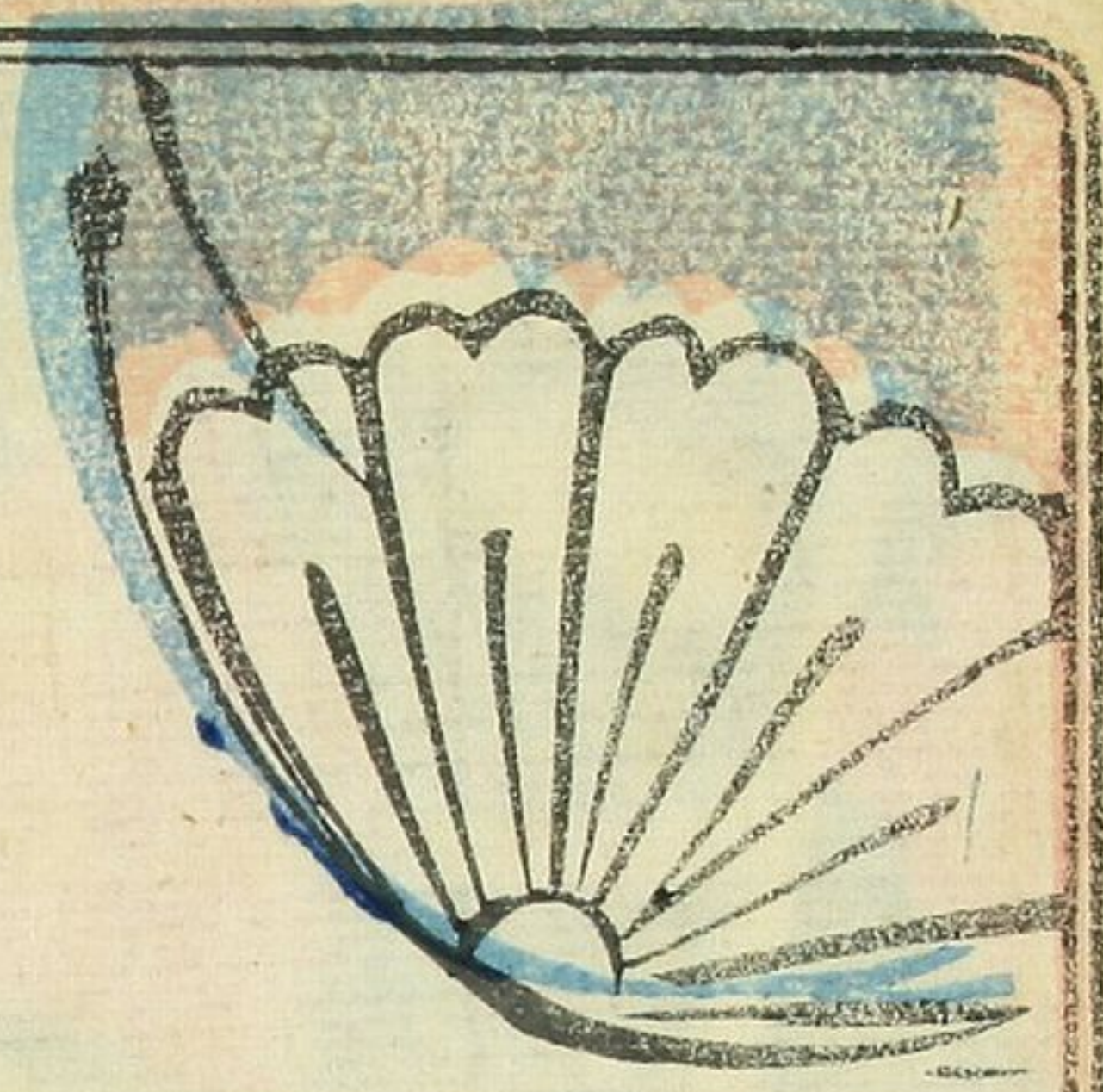
15

20

25



A530  
8



柳香編

國政函

金松堂梓

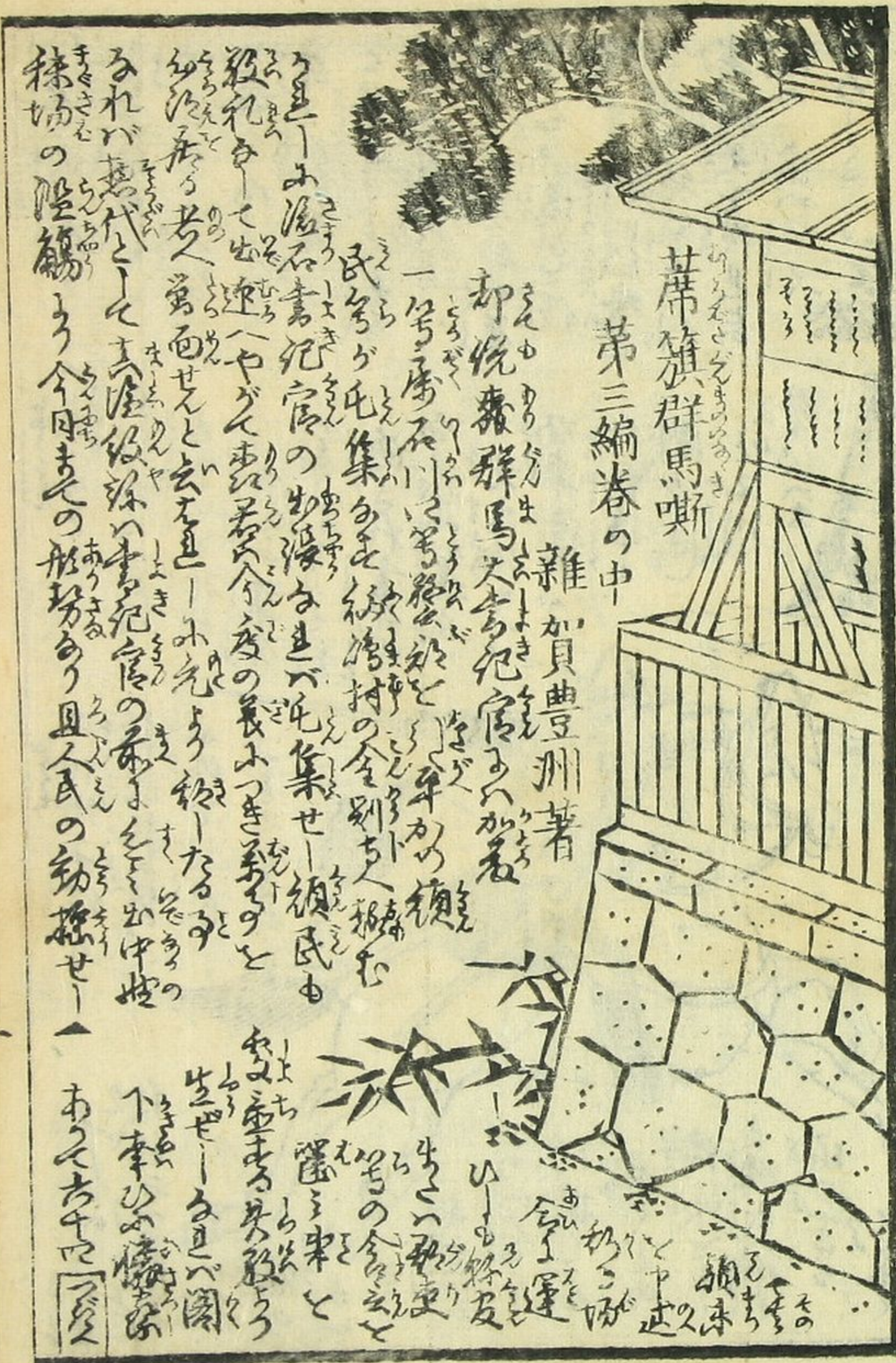


幕旗  
群馬の嘶

中の巻

<98-8348>

幕旗



幕旗群馬嘶  
第三編巻の中

却説幕旗群馬嘶  
一巻の幕旗は...

幕旗群馬嘶の物語は...  
幕旗群馬嘶の物語は...  
幕旗群馬嘶の物語は...

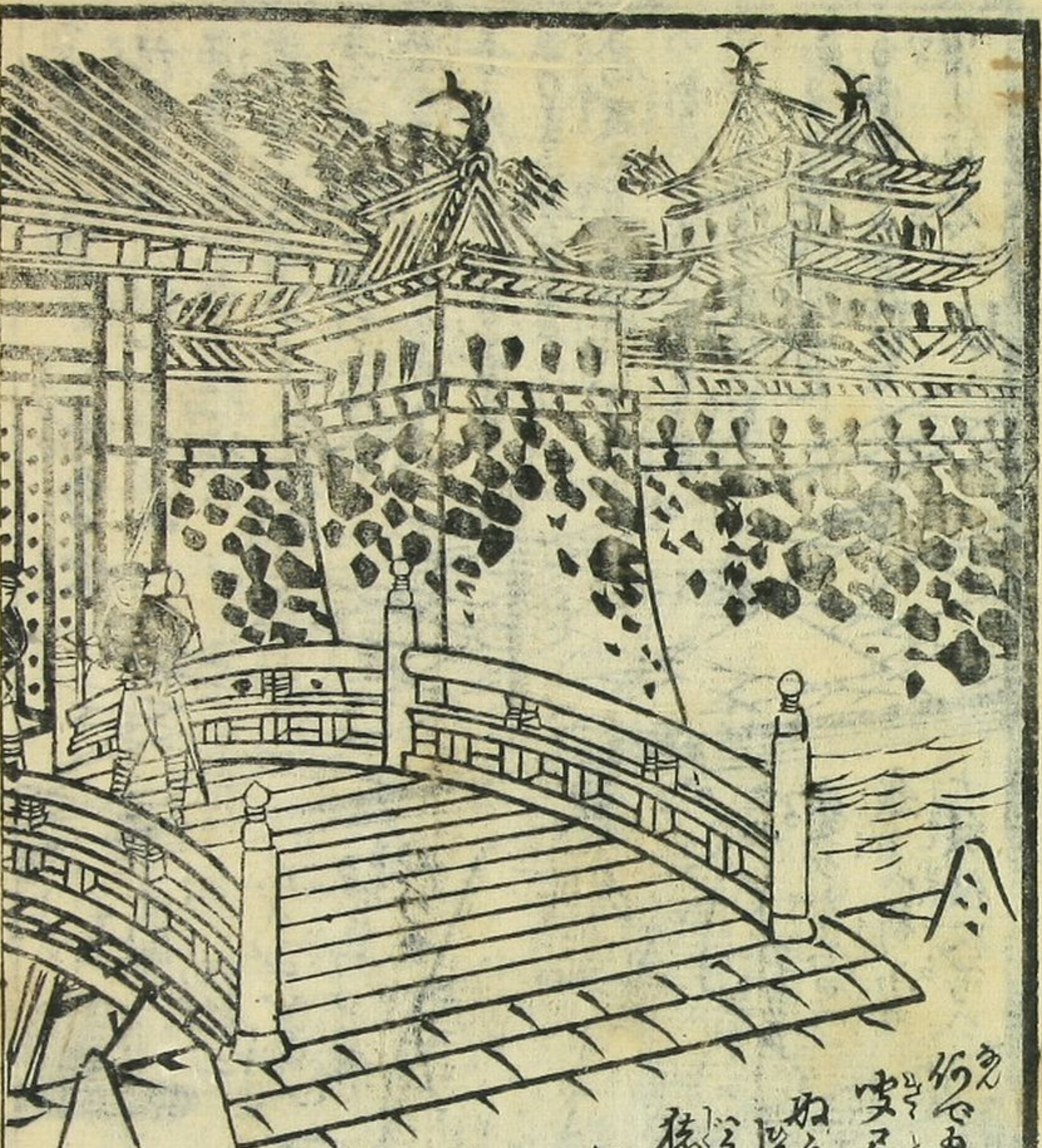
幕旗群馬嘶の物語は...  
幕旗群馬嘶の物語は...  
幕旗群馬嘶の物語は...



とき 村人氏が  
 家之治の身と  
 安んず寛仁の  
 聖慮を承りて  
 學に専らひたる  
 と稱せしむるを  
 今月の能政上の利  
 害得失と後世との  
 爲の一宗の爲に  
 考へて

長官とも  
 伴後志の目  
 解教せんと  
 渡され書紀官  
 一先を傳へ  
 剛りて  
 と石川

二月廿一日  
 後海書紀友  
 顔氏解教の  
 如ゆと促され  
 一月廿一日  
 顔氏の中  
 退教する



何れも我くが形ひる  
 安んずることの  
 ぬらち一足下も  
 後へ  
 顔氏の中  
 退教する



つぎこの極きを待たる書  
 紀官の件へはさしよ  
 さしよは是れを隠核の  
 處へよるなりとの判決  
 老を門警給は百人の  
 巡査を以て全別し人  
 身をもての存若よ  
 多うまご書紀若より  
 原若小暴は代より  
 の怒と前は在事系  
 の構は給令の件へ報  
 知さし目内勢若人  
 も守備の又病いと  
 胃と給令い



● 一白の集まり  
 勢令  
 同更  
 今夜  
 奉勅  
 我由  
 給令  
 士族彼收等ハ  
 我ハ苟小由  
 憂ハ出さる  
 此の

後藤のり  
 きふといふらね若よ  
 飯去頭半肉夜のそひの  
 とあ代たを退き  
 若格の若士族山内雅化  
 山内松多の若人への後  
 人々業もなれば  
 人と振動に控りごと  
 條理が若らふ去能  
 云ふを記さる振の要  
 代をなまらふを中  
 株場の件で十日の村の  
 若ともが全別し小集  
 一と今も給令の指令



● 縣令  
 何れを待た  
 ともさる  
 一白の集まり  
 勢令  
 同更  
 今夜  
 奉勅  
 我由  
 給令  
 士族彼收等ハ  
 我ハ苟小由  
 憂ハ出さる  
 此の









加勢小せしむる  
 あつては終極へ  
 射しおこるる  
 ありは厚志の  
 糸けふかれど  
 加勢の義ハ  
 一玄の介不拒絶  
 らはまどく門  
 義と周知の  
 壯年の者どもハ  
 以ては及第ハ終  
 庭の孫宗樹も

山崎とらけん  
 出陣よりぬり願ふ  
 ありとあ人の  
 面目  
 ありて  
 実ハ山方  
 義を要  
 出陣中  
 者買病の  
 飲る不義後  
 急途と共  
 むひえろむ願



民が七集り新  
 云々の義さかす  
 天いおんを頼頼通  
 とまるをとりて  
 頼民の義小  
 適

志はせ打のめ  
 こして幸らんとは  
 云々の義さかす  
 天いおんを頼頼通  
 とまるをとりて  
 頼民の義小  
 適

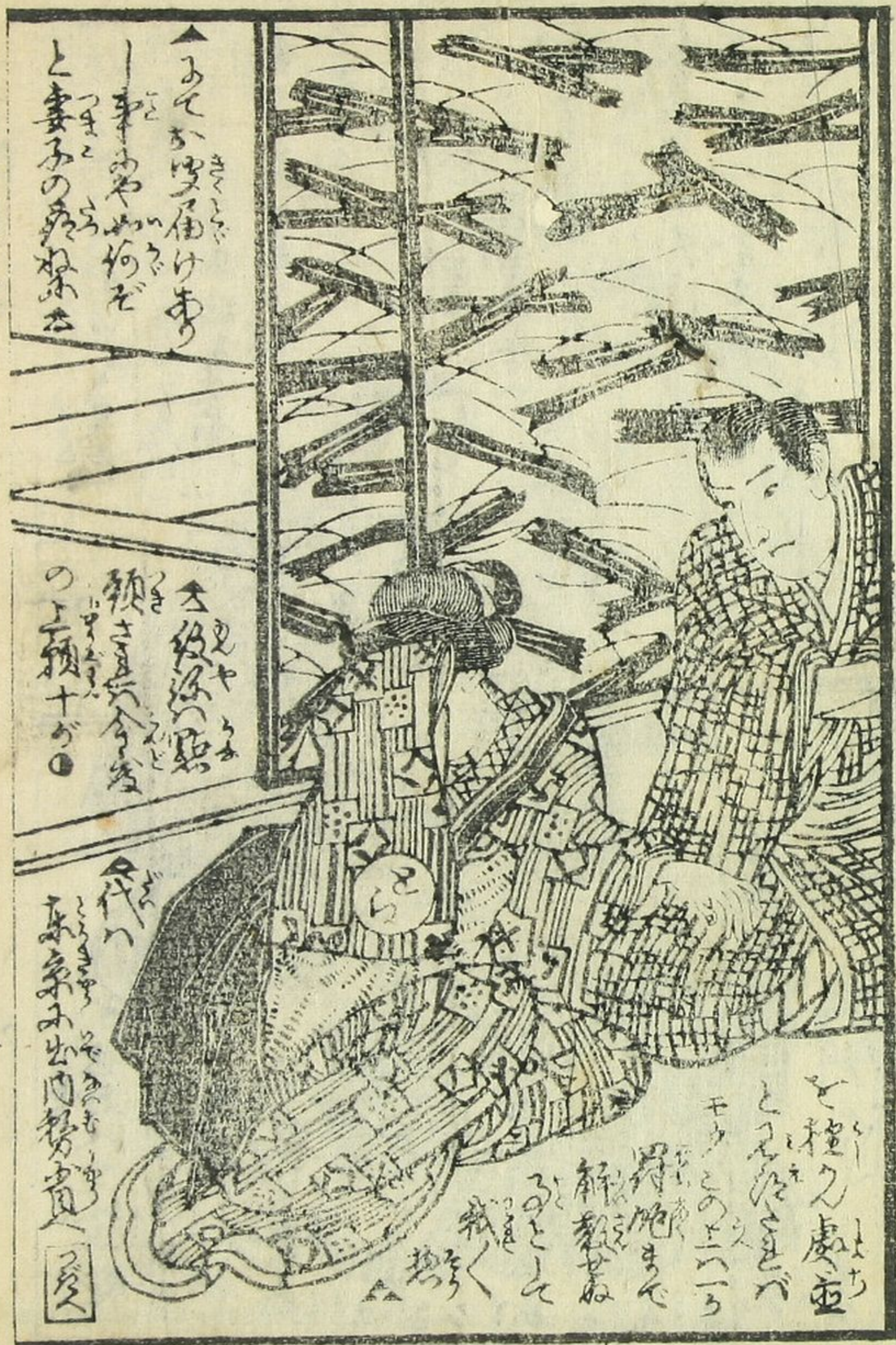
















ときとて...  
 源...  
 の助や...  
 小...  
 是と...  
 報...  
 お...  
 よ...  
 や...  
 あ...

去...  
 ひ...  
 の...  
 の...  
 と...



ち...  
 後...  
 も...  
 と...  
 助...

是...  
 ち...  
 と...  
 の...  
 省...  
 同...  
 次...

羊





つぎあるは  
必直史より  
集合と解散を多く扱代へ  
その節々自着ありてそ後  
餘蘆の不正の産へ上り  
裁判の裁判と作てが却つて  
村のころあるは不肖の世者  
一云と云ひあつて地獄代とも

▲壺條のふり思ひ  
まう多くの罪人あつた  
よ父が配流おひ入ると  
流るゝ報き致の助が  
練めい突ふもとあつとも  
今更級派も然と云  
病うろろ  
病の強  
後よ  
流る

島田傳夜又評

大八尾編

綾中夜紋廻春秋

大八尾編

國定忠次夜百鬼場

大九尾編

名廣洋邊洋

大九尾編

水師隅田曙

大三尾編

腕競心三俣

大五尾編

格蘭氏傳倭文賞

大三尾編

總相場花王夜嵐

大二尾編

父地本問屋

金松堂

問屋

助

010190513934









榛名山朝朗  
箕輪村夕霞

簾旗群馬嘶

三編大尾

金松堂梓

下

10

15

20

25



















つぎ 終る中々  
 巨魁の者と捕縛  
 正統金邊蔵  
 と羽子十六日惣代  
 人相去とのそま  
 魚のさし目揮取  
 あも海物ありと  
 迷ふ傷まを  
 建しとせらるる  
 那中陣練場  
 組合村と  
 官事  
 佐治  
 とも

この中々  
 大正  
 金邊蔵  
 羽子  
 十六日  
 惣代  
 人相  
 去との  
 そま  
 魚の  
 さし目  
 揮取  
 あも  
 海物  
 ありと  
 迷ふ  
 傷まを  
 建しと  
 せらるる  
 那中  
 陣練場  
 組合村と  
 官事  
 佐治  
 とも



たに 解教  
 さるるの  
 中々  
 巨魁  
 正統  
 金邊  
 蔵  
 と羽子  
 十六日  
 惣代  
 人相  
 去との  
 そま  
 魚の  
 さし目  
 揮取  
 あも  
 海物  
 ありと  
 迷ふ  
 傷まを  
 建しと  
 せらるる  
 那中  
 陣練場  
 組合村と  
 官事  
 佐治  
 とも

あつた  
 村の  
 安寧  
 を保  
 護す  
 べし  
 といふ  
 者  
 あり  
 といふ  
 者  
 あり  
 といふ  
 者  
 あり











と掛うのへも  
 威をまじり  
 とるも角分  
 の向状なれ  
 をと鏡を

るおねと味はるる  
 ると糸糸と眼糸で制一器器署へと引さく

つぎ  
 おも  
 小代へん  
 父の罷り

おの助  
 徐の解  
 月一回  
 縁うし  
 と役の助



と権急人殺と  
 那み罪へるへ捕縛  
 性へるへ捕縛  
 返一重巡者へとせぬ

悪役の助がとる者ふりて移る  
 鏡の影なるも編ふ父役縁が  
 かの業力とねとに我々と貴  
 徹んとせしは遠ひる生世  
 あんされどとる吉村の巻  
 役の助が捕縛さぬと

仙

のつ  
 足込  
 見込  
 北  
 奉  
 器  
 金  
 六  
 日  
 敷



つぎ なる由も出候の警吏八日目を待と  
あけら直聖十九日中候取給令す  
西群島形役西と

運しきりては西  
群島形役の以村  
自本申候より申  
林坊境に候  
者ども安人殺候  
業と色い候のま  
あやふふいとも  
未女目と悔候



今お 頃掛りの先と  
りけと候と候  
かまら 御業候  
いれと候と候  
と候

松  
松

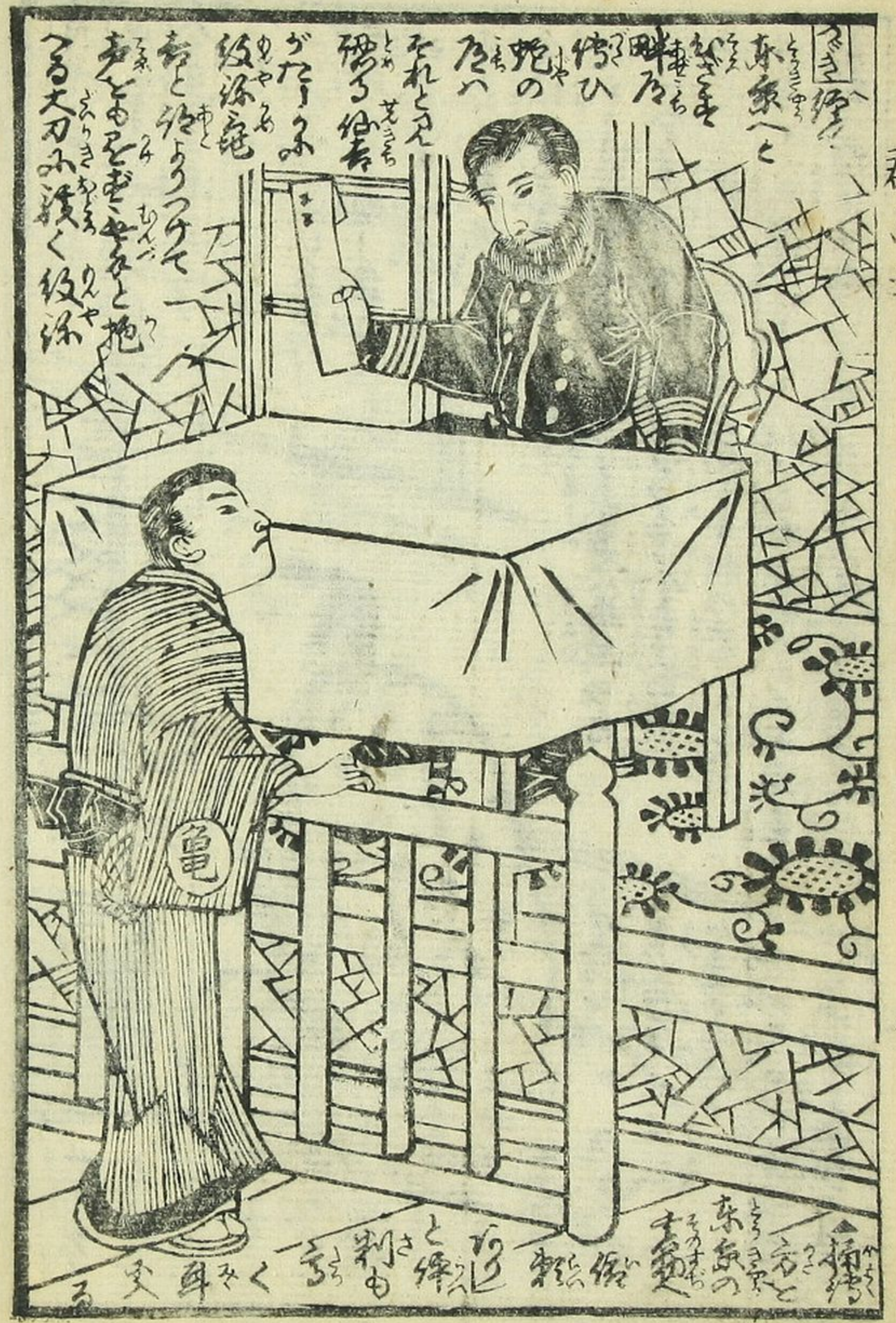
毎四  
村人  
早と  
候  
候  
候  
候

自前候者候覚候の  
處及及及及及自  
今集令者候  
小松心治進ひ候  
松坊まぐ佃一集令  
坊と進て入お付のま  
あふふ申事柄及集  
今場不考候存出候  
揚かさ進不羽女目と候  
者と候者候代巨料の  
坊と候者候村の松本  
井聖の所田柱松本  
本物入進送とあり



松坊まぐ佃一集令  
坊と進て入お付のま  
あふふ申事柄及集  
今場不考候存出候  
揚かさ進不羽女目と候  
者と候者候代巨料の  
坊と候者候村の松本  
井聖の所田柱松本  
本物入進送とあり











藤竹棋  
群鳥  
鳴

九  
竹  
鳴

